

ロジェ・マルタン・デュ・ガール

『チボー家の人びと』

マルタン・デュ・ガール（一八八一〜一九五八）は、代々裁判官、判事を職とする家系に生まれた。父は、パリ市初審裁判所の代訴人だった。後年、彼の小説に見られる精密な史実と構成力は、この家系が生んだものといえるかもしれない。

ソルボンヌ大学文学部からパリ古文書学院に学び、卒業論文にジュミエージュ修道院遺跡についての考古学的論文を書き、優秀な成績だった。最初の長編小説『生成』のあと、フランス中をゆるがしたドレフュス事件を背景にした大作『ジャン・バロワ』を書いたが、出版社にこれは小説ではない、調査資料だと断られた。結局、アンドレ・ジードの推薦で出版され、第一次大戦直前の青年たちの大きな共感を得た。彼は大战と同時に動員され、講和条約締結まで戦争を直接体験した。

その翌一九二〇年から三九年まで、十九年を費やして創作された『チボー家の人びと』は、彼の戦争体験が熟し、発酵し、結晶したものである。この八部十一巻の大作は「一九一八年十月三十日衛戍病院えいじゆにおいて、死は、きみが至純にして悩める心の中に熟しつつあったたくま遅しい作品をこぼち去った」友人にささげられている。

第二次大戦中は、ドイツ軍のブラックリストに載せられたため、フランス国内で転々と居を移した。その間、次の大作『モーモール大佐の回想』の執筆にかかったが、健康がすぐれず、この作品を未完成

にしたまま、一九五八年八月二十二日、心筋炎発作で死んだ。

彼は晩年の回想で「幾たびとなく『戦争と平和』を読みかえしながら、決定的に小説を書こうという決心をした」と、作家になった動機を述べている。『チボー家の人びと』という大河小説もまた、トルストイの『戦争と平和』の強い影響を受けて、書かれたものだ。

ここに描かれているのは、第一次大戦を境に、十九世紀から二十世紀へと転換する歴史の中での、一群のフランス人たちの運命である。

カトリックのチボー家とプロテスタントのフォンタナン家、そのなかで成長する若者たち——チボー家の激情的なジャックと、自制的な兄のアントワーヌという兄弟の性格対比を軸にして、物語は展開される。また第七部『一九一四年夏』は、彼一流の史料を駆使し、革命と戦争の間で激動する歴史の悲劇をとらえた圧巻である。この部分に対し、一九三七年ノーベル文学賞が与えられた。この小説が、文学好きの人たちに読まれるだけでなく、いまでも広く若い人たちに愛読され続けているのは、そのものもつ強烈なヒューマニズムのためだと思われる。

文中引用した山内義雄氏訳は一九三八年（昭和十三年）に初めて紹介されたが、戦争中は『一九一四年夏』の部分の出版が禁じられ、一九五二年に初めて完結した。名訳の評価が高い。

1

手にとると、軽い純白なわた毛だった。プラタナスの実からはじけた綿だと、教えてくれた人がいた。それ

が、いつ降りだしたのか、無数に、吹雪のように、セーヌ川の岸を乱れとんでいた。手のひらにのせ、フツと吹くと、また吹雪の中に帰っていく。その下で、ジェラニウムの花が炎のように、真つ赤に咲いていた。パリの夏。ジェラニウムのおい。その中を歩きながら、私は『チボー家の人びと』の主人公、ジャックの青春を思い浮かべた。

一九一四年夏のある夜、ジャックはパリのテュイルリー公園にいた。人気のない、深夜のベンチにひとり、身を横たえる。強烈な、むれるようなジェラニウムのおい。彼はジェンニーに愛を告白してきたところだ。

「誰ひとり、ぼくが愛するようになってきみを愛した人はいないんだ」

そういったとき、革命家ジャックの心には、革命も戦争もなかった。そしていま、ひとりになって、彼はただ眠ることを恐れている。愛の歓びを味わい続けるため、じつと目をあけて、あかつきの微光を見つめ続ける。その数週間後、第一次大戦は始まった。戦争は、ジャックの青春と愛を、こつぱみじんに粉碎してしまう。兄のアントワーヌにしても、同じことだった。火のような弟に対し、水のように冷静で、聡明で、節度のある兄だ。医者としての、あらゆる未来が約束されようとしていた。だがそんなことは、戦争の前には何物でもない。ほんのわずかな毒ガスの量が、彼を殺し、彼のすべてを無にしてしまう。

作者マルタン・デュ・ガールが、この小説で描いたものは、結局、青春の墓標ではなかったか。墓碑を刻む彼の筆は、克明で、冷静で、しかも慟哭どうこくと憤怒に満ちている。チボー家の兄弟を軸に、戦争の虚無と破壊を書き上げるのに、彼は十九年を費やした。十九年の歳月は、あるいは長すぎたのかもしれない。この大河小説が完成したとき、二十世紀は二つ目の世界大戦に突入し、さらに大きな墓標を要求していたのだから。マルタン・デュ・ガールは、二つ目の墓碑を刻もうとはしなかった。ただ、チボー家のアントワーヌに、こんな悲痛な言葉を吐かせているだけである。

「二十世紀の人間などから、どうして真に偉大なものが期待できよう？」

午前四時すぎ、シャンゼリゼの大通りを私は歩いたことがある。

あの、華やかなパリは、どこへいつてしまったのか。目を奪うショーウィンドーもなければ、観光客や若者たちで、花が咲いたようなカフェーもない。シャンゼリゼの出发点になる凱旋門の下で、「無名戦士」のための永遠の火だけが、ただ風にゆらめいていた。ひとりたたずむとき、その火がなんと心にしみることだろう。やがて、コンコルド広場の空が、オベリスクの上で白み始める。エッフェル塔が、うつすらと姿をみせる。凱旋門、オベリスク、エッフェル塔——そうしたものが、観光パリの商標だけではないことを、暁だけが教えてくれるように思った。

ある日、偶然知り合った画家のダニエル君は、やせた、青白い、物思いに沈んだまなざしを持った、二十七八歳の青年だった。私は、彼が従軍したというアルジェリア戦争の話を聞きたかった。エッフェル塔に近いアトリエを訪ね、その話をきくうちに、アルジェリアでの戦争体験がこの青年にとってどんなに深い傷だったのか、その傷をどんなに大切に思っているのかが、口ぶりからありありと感ぜられた。ダニエル君は、いつもアルジェリア人の自由と独立を信じ、それを支持していたのだという。その彼が、自分で志願し、アルジェリア人のFLN（民族解放戦線）を相手に戦った。

なぜ？

「ぼくは人殺しの目撃者になりたかった。愚劣なことを自分の目で見たかったのだ」という。

彼は望み通り、フランス軍がアルジェリア人に加えた残虐、暴行の数々を見た。ヘドが出るほど十分に目撃した。アルジェリア側のテロも、同じように残酷だった。どちら側が最初に手を出して、どちら側が報復だった。

たのか——そんなことは、彼にとっては無意味な質問だ。ただ一つ確かな答えは、軍人は敵も味方も区別なく、子どもがおもちゃを喜ぶように、いつも戦争が好きで、戦争に酔っぱらうものだということだった。

ではダニエル君は？ 彼はいつも目撃者だったのか？

私の問いに、彼は憂鬱そうに首を振った。彼はアルジェリア人を撃ち殺したのだ。やはり目撃者でさえ、いられなかった。

「自己防衛のために？」

私の出した助け舟にも、彼はもう一度、首を大きく横に振った。

「アントクシカション！」

狂気、中毒、陶醉……答えはそれだけだった。

少なくとも自分だけは、ほんとうのフランス人であると信じたかった。だが一人として、信用してくれるアルジェリア人はいなかった。鉄砲を撃ちながら、「友人だ」と叫んだところで何になろう。ダニエル君は、ちよつと自嘲的な笑いを浮かべた。彼はついに戦うことを拒否し、軍法会議にかけられた。下士官から一兵卒に降等され、最も危険な最前線に配属された。まもなくドゴール將軍がアルジェリア独立を認めた。

ダニエル君は、政治家を信用してないという以上に人間を信じていないようにみえた。「悪いのは政治のせいだ」という考え方に、何度も強く反発して「人間性の問題だ」といつていた。

政治が何を解決してくれるのか——それは、革命に命をかけるチボー家のジャックにとつても、いつも、のどを締めつけられるような苦しい問いだった。人間のいやなところは現在の社会の結果だ、とジャックは自信をもつていい切れなかった。彼の人生とは、人間を信じ切ろうとする内面的な戦いだったともいえるだろう。だから彼は、使命感にもえた仲間の革命家たちに向かつてどなるのだ。

「乱を好むもの……すべての革命家の底の底にはこうした気持があるのだ！……きわめて犠牲的精神に富んだ

もののなかにも、ぼくは、往々こうした酔いしれた悪魔のすがたを見るのだ」

話を画家のダニエル君に戻してみよう。彼は政治のスローガンを、まるで信用していない。そんなお題目を信じるのは、在郷軍人ぐらいなものだろうともいう。

では何を描きたいのか、と聞くと、自分には美醜の観念はないと思うと答えた。

「ぼくが描きたいのは、見たもの、見られたもの、すべての統一なんだ」
いきなり「コカコーラ」の商標を手にかざして、彼はしゃべり続けた。

「これこそすばらしい統一じゃないか。渴き、冷たさ、刺激——このマークにはすべてを統一した、完全なイメージがあるんだ。ぼくはコカコーラのような絵を描きたい」

私はだまって、熱っぽい彼の表情をながめるほかはなかった。

もう一人の青年、ベルモン君とは、仏独国境にあるフランスの都会ストラスブールで会った。ストラスブール大学カトリック神学部の学生だ。彼も、アルジェリア戦争に行った。将来神父さんになる人だけあって、その話はたいへんおだやかで、節度あるものだった。だが、そのベルモン君も、アルジェリア戦争の話にふれると、たちまち激しい口調になった。

「フランス人も、アルジェリア人も、同じように墮落しました」

「戦争は、どんな人間も悪魔にしまいます。あの戦争で、フランスの方がアルジェリアより人間的だったと誇れるものが、何かあったでしょうか」

美しいストラスブールの町も、人通りが絶え、時計は午前二時をまわっていた。給仕が眠たそうな顔で、隅につつ立っていた。

「戦争を見て、カトリックの学校に入ることにしました」
と、ポツンといった。私は、画家のダニエル君が、

「戦争に行ってから、絵を描かないと自分がめっちゃめっちゃになると思うようになった」といった言葉を思い出した。こうして私は、フランスでたまたま会った二人の青年から、戦争の意味するものはどこの国でも同じなんだという平凡なことを、胸にしみて教えられたように思う。

『チボー家の人びと』では、動員令の下った晩、ジャックが、恋人ジェンニーの腕をつかんでこういつている。

「いいかね、ジェンニー、きょうからは戦争を認めるか、認めないか、それによって人間を分類しなければ！」

2

「仕事、陽気さ、そして、ときおり革命」

フランス人を評した、ロシア人の言葉だ。なるほど、パリにきたら、人々は陽気に、のんびりと働いていた。それに、笑いこぼれるような初夏の陽光。青空にしみとおるようなブルーローニュの森……新聞に出ていた「愛敬キャンペーン」の話が、そんな陽気なパリにふさわしかった。いわく——パリっ子はローマっ子に比べ、愛敬においてやや欠けるところがある。ローマ見物の観光客が、パリのそれより何倍も多いのは、つまりそのためではないか。

パリの市民諸君！ フランスのために微笑しよう。笑って、笑って、笑ったままで、お客さんを迎えよう。

記事のわきに、飛行場で観光客に花束をおくって、愛敬をふりまくパリ娘の写真が載っていた。「仕事、陽気さ」でいっぱい。

「ときおり革命」の方は、当分出る幕がなさそうな、天下太平のパリである。コンバ新聞社のスマツジャ社長

に会ったら、こう論評してくれた。

「みんな、うんざりしているんだ。革命にも、戦争にも、政治にも……。そうしたことは、万事ドゴール將軍にやつてもらおう。おれたちは、働いて、金をつくって、バカンスのことでも考えよう——そんな気分じゃないかな。フランス人全体が、少々骨休みしたがっているんだ」

慨嘆にたえん、といった表情で、六十八歳の社長さんはしゃべった。

『コンバ（戦闘）』といえば、レジスタンス（対独地下抵抗運動）の中で生まれ、作家カミュたちが活躍した誇り高い新聞だが、近ごろは経営が思わしくないらしい、といううわさがもつぱらだった。理屈っぽい左派系新聞は、いまのパリ・ムードにあわないのだろうか。

「景気はよくないな。そりゃあ、新聞同士のたたかいは、レジスタンスよりむずかしいからね」

レジスタンスの勲章に輝くスマツジャ氏は、めがねの奥でいたずらっぽく笑った。

この新聞社から、三軒おいた隣に、カフェー「クロワサン」がある。一九一四年七月三十一日、つまり、第一次世界大戦の直前に、この店先で、反戦運動の社会主義者ジャン・ジョーレスが暗殺された。『チボー家』では、主人公ジャックと恋人ジェンニーが、たまたまその歴史的瞬間を目撃することになっている。ジョーレスは即死した。二人はぼう然と、店を出る。いつの間にか、モンマルトル通りのデモに巻き込まれていた。若者たちは国旗を振り回し、怒号し、奔流のように通りにあふれかえる。

「ドイツを倒せ！……カイゼルを倒せ！……ベルリンへ！……」

大戦前夜の緊迫感をとらえて、息もつかせぬ数ページだ。

さて、そのカフェー「クロワサン」。パリの、どこの街角にもあるような店。床に「ジャン・ジョーレス氏、ここで暗殺さる」と刻んだ、銅板のはめ込みがあった。愛想のいいあるじ、ペランさんが話してくれた。命日

の七月三十一日には、共産、社会党員が集まって、表通りが交通止めになるほどの混雑だということ。ジョーレスは社会党員だったが、いまでは共産党の方が「自分たちの英雄」にしてしまったということ。テーブルで話し込んでいたお客さんたちが、いつの間にか話をやめ、ペランさんの話にきき入っていた。

「私は共産党でも、社会党でもありません。政治には、いっさい関係なし。その方が、商売には賢明です」
ペランさんは、当時から数えて、四代目の経営者ということだった。

ジョーレスが暗殺された翌日、八月一日午後四時半、パリの空に寺院の鐘が鳴りわたる。総動員を告げる、陰気な、とむらいの鐘のようなひびき。この鐘の音が、すべてを一変させてしまう。戦争反対の国際主義者たちは、魔術にかかったように、たちまち祖国を守る国家主義者になった。

「祖国、正義、防衛」

フランスの若者も、ドイツの若者も、同じ合言葉を叫びながら、戦場で殺し合う。そうした狂熱のなかで、ジャックだけは変わらない。同志と飛行機をやとい、アルザスの戦場の上空から反戦ビラをまこうとする。だが、飛行機は墜落し、重傷で口もきけぬままに、射殺される。一枚のビラもまかず、何の役にもたたず、まるで虫ケラのように――。

ジャックが殺されたアルザスは、美しい土地だ。みるからに豊かな森と畑。小さな、ひなびた村。夕日にもえる教会のステンドグラス。パイプをくゆらす老人。学校帰りの子どもたち。国境ぞいにドライブしながら、私はいいい知れぬ期待にいつも酔っていたようだ。

——こんどは、ライン川がどんな顔をして現れて、私を驚かすのだろうか。つぎの村の金髪娘たちは、どんなおめかしをして、手を振ってくれるだろうか。

アルザスは美しいが、しかしその歴史は悲しい。一八七一年、普仏戦争の結果、アルザスはフランスからドイツ領になった。学校では、ドイツ語しか教えられないことになる。老アメル先生は、最後の授業で、黒板いっぱいフランス語の大きな字を書く。

「フランス万歳」

そうして、頭を壁に押しあてたまま、手で合図した。

「もうおしまいだ……お帰り」

アルザスの悲しさを描いた、ドーデの短編『最後の授業』の一節である。

しかし『最後の授業』は、決して終わったわけではなかった。第一次大戦でフランスが勝つと、こんどはドイツ語の「最後の授業」があつた。第二次大戦でドイツが占領すると、またドイツ語に。フランスの大勝利で大戦が終わると、もう一度フランス語に。歴史は同じことを何度も、何度も、繰り返した。だから、たいていのアルザス人はフランス語とドイツ語を話す。

ストラスブールの牧師、フィーデルさんは、四代目のアルザス人だという。彼は、歴史の持つ愚かしさを、こんなふうに皮肉ってみせた。

「第一次大戦で、フランスがアルザスを取り戻すと、二世代以上のアルザス人はほんとのフランス人だというおふれを出しました。第二次大戦でドイツが占領すると、二世代以上は真のドイツ人だといいました。だから私は、真のフランス人であり、真のドイツ人というわけです」

フィーデルさんは、ドイツの占領中、五百人の村の村長さんだった。そんな小さな村でもドイツ兵がレジスタンスのフランス人に殺されたり、その報復に、フランス人が処刑されたりした。フィーデル牧師は、だまつて、二つの国の死者たちをとむらった。激しく憎み合つて死んだ若者たちの上に、同じように「神のゆるし」をこうた。四四年十二月、待ち望んでいたアメリカ軍が、救世主のようにやってきた。が、アメリカ兵たちは、

町にあるドイツ語の表示を見て、ドイツ領に入ったと勘違いをしてしまった。うれしさのあまり、通りにとび出したフィードルさんは、いきなり銃を突きつけられた。

「私はへたな英語で『フランス人だ、フランス人だ』と大声をあげました。もう少しで、殺されるところでした」

彼は、両手をひろげ、首をすくめ、おかしいとも悲しいともつかぬ表情を浮かべてしゃべった。

それも、これも、みんな国境のせいではないか。国境とは、また何と不思議な、恐ろしい存在なのだろう――二日間、ドイツとフランスの間を自動車で走りながら、私が考えたのは、そんなことだった。

日本には、地面の上にひかれた、一本の国境線というものが無い。われわれの国境線とは、海上にある見えない線のことだ。その向こうは他国ではなく、公海である。だから、それを守るために、あるいは変更するために、幾百万の人間が命を捨てるという、不気味な一本の線をわれわれは目で見ることができない。アルザスとは、そうした国境線で囲まれた土地である。それは、橋の上を横切り、山を走り、畑地を分け、最後に人間の運命を裁断する。長い国境には、いろいろな顔があった。ストラスブールでは、自動車が延々と列をつくつて、ライン川にかかる国境の橋を、あつさりと越えていく。北のビッサンブールのように、農夫と馬車がトコトコと越えていく国境線もあった。このあたりの旧マジノ線地帯では、名残のトーチカが、ゾウのような細い目をあけて、ドイツ領をにらんでいたし、「立ち入り禁止」の札の向こうには、戦車の残骸が、夏草の中で、つつ立っていた。野原にぽつんと一本立てられた「立ち入り禁止」。私は、ストラスブールで会った「低ライン部隊司令部」のT中佐のことを思い出した。

「撮影は、どこでもご自由にどうぞ。ただし〈立ち入り禁止〉とある場所は、軍事上ご遠慮ください」
中佐殿は丁重だった。

「〈軍事上〉って、フランス軍は西ドイツ軍と戦争することがあるのですか」

彼は、とんでもないといった表情で、首を振った。

「では、なぜ？」

答えは、簡単、明快だった。

「ムツシュ、それが軍隊というもののなのです」

その通り、それ以外の答えがありうるだろうか。それが「軍隊」というもののなのだ。それが、「国家」というもののなのだ。その怪物のような、微動だにしない巨大なものに、一途に突進し、死んでいったジャックのことを、私はもう一度思いかえした。

(二九六五・七・十八〜七・二十五)